

## 指定討論者コメント

司会：それでは討論に入ります。まず、指定討論者お二人を紹介し、順に発言していただきます。最初は、一橋大学大学院社会学研究科教授の伊藤るりさんです。伊藤さんのご専門は国際社会学で、フランスにおける移民問題等を長らく研究なさっておいでですが、最近はアジアにおける女性の移住労働者の問題についても実証的な研究を積み重ねていらっしゃいます。

次は、現代社会学科の教授である、ユ・ヒョジョンさんです。ユさんは東・北アジア地域の民族関係についての歴史的研究を専門にされております。それではお二人、よろしくお願いします。

### 〔討論者〕 伊藤るり ITO Ruri

今日は、お招きいただきましてありがとうございます。私は、格差論を体系的に勉強するということがこれまでなかったものですから、大変良い勉強の機会を与えていただいたと思っています。

今ご紹介いただいたように、私は今、仲間数名とアジアにおける女性の国際移動研究をしています。家事労働とか介護労働を担う女性の移住労働者を追跡するというので、これまで、送り出し側はフィリピンを中心に、そして受入れとしては、香港、台湾とかシンガポール、それから韓国に調査に行きました。

そういう視点から、今日のテーマの格差という問題を考えますと、南北間格差、国と国との間の格差、それから国内の格差、今日話題になったのはそれだと思いますけれども、国民と移住労働者、あるいは正規労働者と非正規労働者であるとか、それから男女の間の格差というの、そのなかには入ってくると思いますし、世代間の格差というのもあります。介護の問題などは特にそれが大きな問題となってきたように思います。

格差を内部に持った社会が二つ以上あった

場合、その間の格差の問題というのもあるし、その格差が入れ子状になっているような問題というのもあります。この複数の格差がいろいろな布置関係にあって、多重構造というか、多層化しているということが、グローバリゼーションの帰結の一つとして、とても重要な傾向ではないかと思うわけです。

また同時に、移住労働者の場合、ある社会の一番貧しい層が移動するというよりは、一番貧しい層よりもちょっと上で、渡航費が工面できたり、あるいは前借金をしたりするケースもありますけれども、いずれにしても最底辺層ではなく、動けるのはむしろ、最底辺よりも少し上の層であることが多い。私たちが研究する家事労働者の場合、住み込みが多く、受入れ社会のなかでは豊かな階層のところにいていく。このように格差のある社会同士が、どのように相互に接続したり、接続



したりするとか、そういうような問題を、私たちは見ているわけです。

たとえば、挽地さんが取り上げた移民の問題ですけれども、今、研修生の問題が、大きな注目を浴びていると思います。新聞などでも時給300円で働かされている研修生、技能実習生の問題が取り上げられていて、こうした人たちのなかに女性が増えているといえます。過半数が女性になってきたという話もあるわけですね。

このような労働の形態が、今日も話題になっている日本の非正規労働者の増大であるとか、日本のなかの格差構造とどのように関わっているのか。あるいは中国の内部の格差がどう作用しているか。そのなかで女性が多いということですから、こうした非常に複雑に重層化し、連動している格差というものが、アジアにはあるんじゃないかということを目ごろ考えています。そんなことを頭に置きながら、今日の三つの報告をうかがいました。

グローバル化のなかで格差は世界各地で広がっているけれど、格差の語られ方という問題もあります。日本の場合、今日は、外国人労働、移民の問題を取り上げてくださったのでよかったんですけど、多くの場合、格差を語るときに、定住外国人の問題を捨象した形で進みがちです。何か一国だけで格差問題が起きているような錯覚を持ってしまうという部分があるのではないだろうかというように思うわけです。

私は今、格差社会について全体としてどのように思っているかということをお話しましたが、これから簡単に各報告について、感想と質問を1〜2付け加えながらお話をさせていただきます。

まず岩間さんのご報告は、総中流社会論と

格差論とを、手際よく比較してくださって、大変勉強になりました。私が特に興味深うかがったのは、「なぜ『格差論』は大量消費されるか」というところです。格差論の物語というのがどのような形で消費されるのかということについて、岩間さんの解釈は、どうやら社会統合に向けてこれが働いているんじゃないかということですね。普通だったら格差によって社会は分裂するわけなんだけれども、岩間さんの解釈は逆で、これが実は統合的な作用を持っているんじゃないかと、非常にユニークな視点を出されたなと思いました。

要するに日本社会に属している人たちが、日本社会というものを格差社会と認識して、そのなかで自分の位置を見極めて、自分なりの物語というものをつくるんだということであって、これは最後の第三報告で渋谷さんがマジョリティの側の存在論的な不安として語ったわけですが、どの立場であれ、この社会のなかで、自分の立ち位置はどこなのかということ、やっぱり格差社会論のなかでみんな考えていると。それは確かにそうだなと思いました。

ただ、もう一つ、格差是正というものが本当にすぐにでも是正可能な格差として今あるのかという点については、疑問かなと思うところもあります。労働とは何かという、非常に根本的な問題まで引き起こすような格差、同一労働・同一賃金ということが自明ではなくなっちゃった社会があります。同じ職場で同じ仕事をしているのに、全然違った賃金や待遇を受けている、身分的な格差がある社会のなかで、本当にそうした統合的な方向にこれが向くだろうかということ、ちょっとわからないところもあります。むしろ私が疑っているのは、この「格差社会」という言葉が氾濫

するなかで、格差というものに、みんな慣れていくというか、馴化するという作用も無視できないのではないかなと思うわけです。

たとえば、日本とフィリピンとの間の経済連携協定のなかで、今日の第二報告のなかでも話題に上がっていた、看護師400人、介護福祉士の候補も600人、合計たった1000人ですけれども、この1000人の方々を入れるために、今年に入って国会で議論になったのが、准介護福祉士です。このことに介護福祉士協会が強い反対を示しています。ただでさえ不安定な介護労働の現場のなかに、さらに格差というものを持ちこんでくるのではないかと。経済連携協定のなかでは、日本人と同等の待遇ということが明記されています。ただ、どの日本人の待遇と同等なのかという問題になってくると思うんですね。

だから非正規というもののや、身分的な格差をたくさん作っていくことのなかで、どの部分にフィリピンの方が入ってくるか。あるいはインドネシアの方が入ってくるのか。外側にある格差と内部にある格差がどう接続するかという問題意識からすると、この格差というものを氾濫させるということが、重要な働きをもっているのではないかという疑いを私は持っています。格差社会ということばの氾濫は、むしろ私たちにこれが当たり前だと思いきませるような方向に向かっているのではないかと、感じているんですね。

2 番目の問いは、岩間報告では、女性の状況について、大沢さんのモデルなどにも触れながら、若干は議論されましたけれども、一体この格差社会の展開は、ジェンダー格差を、どうように展開させていくのか。階級格差が広がっていくなかで、ジェンダー平等とされていたものは、どうなるのかということ

について、もし岩間さんが何か見解があったら、おうかがいしたいと思います。

それから第二報告についてですが、挽地さんの移民のとらえ方については私も大賛成で、日本では「移民」ということばの使い方に強いバイアスがかかっています。移民政策というものの片肺の政策で、出入国管理しかなくて、統合政策というものを欠いた、アンバランスな施策で今日まできているわけなんです。

ただ説明のなかで私が気になったのは、外国人労働者の問題を論じる際にジェンダーの視点が見られなかった点です。今年の2月ぐらいに、男女共同参画会議の専門調査会メンバーでもある、藻谷浩介さんという方が言ってるんですけど、日本では外国人労働力で労働力不足を補うのではなく、女性労働力を、今働いていない女性を働かせれば、語学を教える必要もなければ、文化の違いもないから大丈夫じゃないかと述べているわけなんです。つまり、外国人労働者と女性労働者はほとんど互換的なものとして、経営の立場にある人達の頭のなかにはあるのだなということです。これは戦後の雇用政策がずっと一貫して、暗黙のうちに、あるいは明示的にも、女性を基幹労働力ではなく補助労働力と位置づけていたことと関連します。このようにして日本経済は外国人労働者を入れなくても、奇跡的な成長を遂げたと、外国でも言われているわけなので、この点について挽地さんはあまり触れられていませんでしたけれども、どのようにお考えになっているのでしょうか。

それから最後に、渋谷さんのお話は、同感できるが多々あります。大学のなかで、なんで私は仕事があって、同じぐらいの能力、あるいは私よりも優れた能力を持った人が、安定的な仕事の場にいられないのかというこ

とについて、存在論的な不安にまみれた状態にあるんだけど、たぶんそこでもジェンダーは関わりがあって、女の場合は「頑張らんくちゃ」というのがあるんですね。性差別のなかで、せっかく安定的な雇用という場を手に入れた、後輩とか同輩の人たちのために、頑張っってこれを広げていかなくちゃみたいなの、ミッションみたいなものがある、そこでもやっぱり、同じマジョリティなのかもしれないけれども、若干の違いはあるか、と。

また渋谷さんは、日本が第三世界化していると言われましたが、グローバル化のもとの第三世界化については、乾燥機の譬えがあります。乾燥機というのは中心は揺れないけれど、周りはどうでも揺れていくと。

この譬えは私の譬えじゃなくて、アルゼンチンの物々交換クラブというのがあり、その

代表をしている人の表現ですが、真んかにいる人というのは揺れないけれど、外側の人たちは自分の意思で、どんなにがんばって振り回されないようにしようと思っても、外側へすっとなでいってしまうと。この譬えから考えるならば、日本も中心ではなく外側の揺れのなかに入ってきていると考えていらっしゃるのか。また、南米の場合には米国の覇権の問題がありますが、政治的な面でも日本は第三世界と似ているとお考えになっていらっしゃるのか。

最後に統治する側が実はマルチチュードの側にあると、最後におっしゃいましたけど、これは意味がよくとれなかったもので、もし時間があったら簡単に補足していただきたいと思います。以上です。

〔一橋大学大学院社会学研究科教授〕

## 〔討論者〕 ユ・ヒョジョン (劉孝鐘) YU Hyo-Chong

ユです。名前からおわかりかと思いますが、ぼくは外国人で韓国出身です。今日はいろいろなことを考えながら、お話をじっくり聞かせていただきました。

というのも、個々のテーマや内容が自分の出自といいいますか、この日本での生活の条件とも深く関わるものでありましたから。たとえば、挽地さんのご報告のなかで用いられた「包摂」か「排除」かということからすれば、私は今、日本に「包摂」されているのか、あるいは「排除」されたままなのか。あるいは、渋谷さんの問いにもあったように、いわゆる多文化社会の一員として、微力ながらも、自分自身が何らかの役割を担っているのかと振

り返してみたりもしました。しかし、自分としては、当局が仮に「好ましい外国人」として受入れたとしても、その期待とはだいぶ離れた生き方をしているという自覚があります。

三人のご報告ともたいへん丁寧で、その上かなり刺激的なものでありましたのでいろいろ質問なり感想を述べたいところではあります。15分という時間の制約もありますので、できるだけ伊藤さんとの重複を避けながらお





話したいと思います。

まず、岩間報告についてですが、伊藤さんもおっしゃったように、格差社会の現状、あるいは格差論のありようがよくわかるような報告だったと思います。そのなかでも特に、「一億総中流社会」や「新中間大衆の時代」と呼ばれた80年代との比較論は、今後の格差論の行方を考えるうえで、参考になる重要な指摘を多く含んだ貴重なものだったと思います。

二人の論者を紹介する形で、その時代においては、日本全体が「一億総中流社会」という形で捉えられ、そしてそれが「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という肯定的なイメージで喧伝されるなかで、総中流社会には否定的な側面も含まれているのだと、その影の側面に対して警鐘が鳴らされていたという指摘はとても興味深いものでした。

それに比べて、現在の「格差論」のなかでは、あの二人に該当する人がほとんど現れていないと指摘されましたが、ここにおられる渋谷さんの問題意識はそれと合致するものではないかと思いました。

次は質問にうつりますが、一番目は、これは、伊藤さんからも指摘されたいわゆる「社会統合」に関わってです。伊藤さんも述べられたように、人々の関心や要求が「格差の解消」に向かうことによって一定の統合機能が果たせるだろうという側面についてはわたしもそのとおриだと思います。問題は、その後です。つまり、政府あるいは政治に対する大衆の期待が一つの要求に収斂されるところまでとはいっても、その要求に対しての、きちんとした対応ができなくなれば、そのことから統治者側はますます不安になっていって、その不安が今度は大衆の不安を一層高めてい

く事態が予想されますし、実際、そのようなシナリオがいわれたりもしていると思いますが、その場合、「統合」はますます難しくなるということになるのではないかと考えられます。そのような状況は、たとえば、渋谷さんにとっては、むしろ望ましい、新たな局面への移行につながるような好ましいものになるかもしれませんが、岩間さんのいわれる「社会統合」は、そのような場面も見越しているものなのかどうか。もしそうでないならば、そのような事態は、「統合」との関係でどのように説明されるのか、できれば「社会統合」の定義にもふれながらお考えを聞かせていただければと思います。

二番目は、先ほどもふれました、村上や岸本らが、「一億総中流社会」または「新中間大衆の時代」の問題点として指摘したことと関連するものです。かれら二人がそれぞれの視点で指摘したような大衆の政治的無関心や生活保守主義は、あの時代における現実の物的な豊かさにおおれたことによって結果として生まれたものなのか、それとも、それ以前から日本社会なり日本人一般が持っていたある種の弱さが一つの大きな原因になって大衆が総中流論に巻き込まれていったのか、ご見解をお尋ねしたい。わたしとしては後者のようにも思われますが、これについて当の二人の論者などが直接触れていることがあれば、その紹介も含めてお願いします。

次に挽地報告については伊藤さんの方からいろいろご指摘されましたので、ぼくは二つの質問をするだけにとどめます。挽地さんは、人口過剰時代には人口を減らすために移民が送出され、逆に減少時代になると不足な労働力需要を埋めるために移民の受入れを考えるようになるのが一般的であるにもかかわらず、

日本においては、人口減少の時代においてもそのような選択は取られていないことを指摘しました。そこで質問の第一は、これは先ほどの岩間さんへの2番目の質問とも関わると思いますが、このような姿勢なり対応の仕方はやはり長期にわたって一つの体質みたいなものとして形成されたものなのか、あるいは、現在の格差社会のありようも含めて、日本における労働力不足時代そのものにかかわる何らかの事情によるものなのかご意見を聞かせてください。

もう一つは、これはぼくにはとても難しかったところなのですが、挽地さんは、かつて中間層であった人々のなかから貧困層に落ちてくる人々がどんどん増えていて、そしてその人々と、すでに底辺に入っている外国人労働者の間に、職をめぐる競合が生まれているとしたあとに、そこから階級的な連帯が生まれる可能性があるかもしれないとおっしゃいました。わたしの疑問は、端的に言って、競合しているもの同士での階級的連帯がどのようにして可能なのか、ということです。

ましてや、挽地さん自身も指摘しているように、日本人と非日本人間の文化的不平等というものが進行しているなかでの連帯の可能性はかえってますます困難になっていくのではないかとわたしは考えていますが、わたしのこのような考え方は間違っているのかどうか、ご見解を聞かせてください。

最後に渋谷さんの報告にうつります。これもとても刺激的で、先ほども申しましたように、岩間さんの指摘された現在の格差論のなかで欠けているところを埋めるとも重要なお仕事だというふうに思いました。

ただ、全体として、タイトルに示されているナショナリズム論がそれとしては展開され

ていないという印象を受けました。これについて何か見解があればお聞かせください。次に、格差が拡大するなかで統治者側の「変節」や無能力の露呈が見られるというご指摘はよくわかります。また、そのような状況のなかで発せられるさまざまな新たな言説が、まだ自分は中間層にいるという感覚を持ちつつも、「存在論的不安」を抱えている人々にそれなりにアピールするという話も納得できます。問題は、そもそも統治者とその統治を受ける側というように相異なる立場にあるもの同士の、今述べたような意味での「共鳴関係」なり癒着が現実になり立っていたとしても、この両者の立場性の違いからして、その意識の内容、たとえばご報告で予定されていたナショナリズムのありようには自ずから違いがあるはずだと思いますが、この辺についてもう少し説明していただければと思います。

次に、報告のなかで用いられたことばのとりえ方について述べたいと思います。一つは、「マイノリティ」、または「マジョリティ」についてです。「マジョリティ」ということばを説明される際に、渋谷さんが「われわれ、つまりまだ排除されていない人々」と述べられましたが、「マジョリティ」をこのように理解しますと、その対概念としての「マイノリティ」は、「排除されている人々」というようになるかと思いますが、しかしそうになったら、「マイノリティ」は「排除されないといけない」ものになってしまうという疑問が生じます。もう一つ問題なのは、たとえば、マルチチュードという形で渋谷さんが今後に向けた一つのビジョンとして提示されている、ある種の混淆性、多様性の一つの要素なり因子として「マイノリティ」というものを考える際に、その「マイノリティ」に含まれる

人々の「マイノリティ」性の内容および相互関係です。国連などでの用い方とは大きく異なり、日本では実にさまざまな人々が「マイノリティ」として括られている。しかし、そこに含まれる人々がひとりで「マイノリティ」として括られていても、そもそもかれらそれぞれが「マイノリティ」になる原因や理由は多様であります。なかでも、いわゆる多文化社会などを考える際にもっとも大きな存在となる、「ナショナル・マイノリティ」及び、「エスニック・マイノリティ」の人々とそのほかの「マイノリティ」との間に、ぼくはかなり大きな、根本的といってもいい違いがあると考えています。ところが、渋谷さんのようなとらえ方だとそこが見えなくなる。つまり排除されている人々一般を「マイノリティ」として一括し、それぞれの「マイノリティ」性を軽視してしまったら、渋谷さんが、すでに存在している多様性、混淆性をまず認定するところから始まるといった多文化社会は、その出発地点から大きな困難にぶつかることになるのではないかとと思われるのです。

最後に、第三世界としての日本というアナロジーについて触れて終わりにします。ぼくの第三世界の政権の性格についての理解やイメージは、渋谷さんがご指摘しているものと重なるところもありますが、同時に、ご指摘

にならなかった別の側面もあるのではないかと考えています。それは、従属から出発していながらも、従属への対応のありようには多様性があるということにかかわります。つまり、そこには自分を従属させる者への抵抗が、そこからの脱却や自立への志向という形で現れる場合もあれば、従属していることそのものをむしろ拠りどころとする形で自らの要求を相手に貫徹させようとする場合もあります。後者の場合は、従属せざるをえないという、いわば自分の弱さというものをバネにした対応の一つのバリエーションともとらえることもできるかもしれません。

こう考えますと、ご指摘の日米関係に見られる日本の状況は、統治者側の状況だけではなく、国民一般の状況も含めて第三世界のなかでももっともだらしのないもので、失礼ないい方かもしれませんが、もしかしたらそれは「第四世界」のそれといってもいいようなものかもしれません。

この点に限らず、いろいろと失礼なことを申し上げたかもしれません。あるいは誤解によるものもあったかと思います。ご報告がそれだけ刺激的で、多くのことを学び、考えさせられたからだと寛大に受け止めていただければ幸いです。

[和光大学現代人間学部現代社会学科教授]